

『福祿』（梅舒適先生）



甲骨字「福祿」
録甲骨字福祿 己巳深秋 老某 於蘭言室

先月、関学書道部の先輩、岡田祖翠氏の甲骨文字の作品「鳳鳴」をご披露した際、私の手許にある甲骨文字の作品は今井凌雪先生の「虎」とこの2点のみと書いたが、実はもう1点あった。篆刻の大御所、梅舒適先生が書かれたもので、この右側の2文字だけではとても「福祿」とは読めない。左に「録甲骨字福祿」とあるのはじめてこれが甲骨文字の「福」と「祿」なのだと思うが、これがどうして今の「福祿」という字形になるのか、普通の人間では全く検討もつかない。

この作品を手に入れたのは私が胃を切った年の暮れ、平成元年（1989）の歳末チャリティでのことで、入札しようと思ったのはここに書かれている甲骨文字よりは専らこの作品に押されている篆刻印に惹かれたことによる。

「古懽」と「梅舒適」の印が先生の素朴な字と相俟ってうまく調和し、篆刻家の作品として独特な雰囲気がかもし出されているのがとても印象的だった。またこの難解な2文字をいずれは読み解きたいという願望も心のどこかにあったと思う。白川文字学に接近したのはそれから10年後のことである。

その白川先生の字書『字通』でこの2文字を調べてみると

【福】13画（福）14画 **【字音】**フク **【字訓】**さいわい・たすけ・ひもろぎ

篆文 福 甲骨 𠄎 𠄎 金文 福 福 福 福

【形声】声符は畱(ふく)。畱は器腹のゆたかな酒樽の形。〔説文〕一上に「祐(たす)くるなり」とし、〔繫伝〕には「備はるなり」と豊韻を以て訓する。金文に福の字形があり、宗廟に酒樽を供えて祭り、福を求めることをいう。また祭肉を福といい、わが国の「ひもろぎ」にあたる。〔国語、晋語二〕に「必ず速やかに祠りて、福を歸(おく)れ」とあるのは、その祭肉の意。祭余の肉は、同族の人に頒(わか)つ定めであった。

【訓義】1.さいわい、しあわせ。2.とみ、たすけ、神のたすけ。3.ひもろぎ、祭肉。

【禄】12画（禄）13画 **【字音】**ロク **【字訓】**さいわい・よろこび・よい・ふち

篆文 禄 甲骨 𠄎 𠄎 金文 𠄎 𠄎 古印璽 禄

【形声】声符は𠄎(ろく)。〔説文〕一上に「福なり」、〔広雅、釈詁一〕に「善なり」とみえる。天より与えられる福善をいう。金文には𠄎の字を用いる。𠄎は錐(きり)もみ状に刻む形の字であるから、その声を仮借して、賚(らい)・釐(り)の意に用いたものであろう。

【訓義】1.さいわい、よろこび、しあわせ。2.よい、めでたい。3.ふち、禄位、たまわりもの。4.録と通じ、しるす。

また、「福禄」＝幸い、という言葉が既に紀元前800年前後、周の時代を記す『詩経・大雅』に出てくるといふから驚きである。日本などはまだその頃と

いえば縄文時代に分類される頃のことである。



尚、落款印の右の「老某」は梅先生の号「老梅」（「某」＝「椹」＝「梅」）。その上の「己巳深秋」はこの作品を書いた時期、つちのとへび（＝1989年・平成元年）晩秋で、最後の行「於蘭言室」はこの作品を書いた場所で、蘭言室とは梅先生の書斎の名である。

また、遊印の「古權」（こかん）は『字通』に旧好＝古いよしみ、となっている。梅先生が古くから甲骨文字を好んで学び、親しんできたことが滲み出ているこの遊印を押すことにより作品を一層味わい深いものとしている。

この作品、一見素朴だが実際何が書いてあるのか判り難い。ただ白川先生の字書と併せて改めて眺めると、見れば見るほどに飽きることの無い作品である。甲骨文字が本来もっている魅力なのかもしれない。

（平成 19 年 12 月 29 日）